

平成27年度アドバイザー派遣事業実施レポート

鳥取県立米子養護学校

1 研修テーマ 「一人一人をみつめ、自立と社会参加につなげる授業づくり」

2 アドバイザー 創価大学教育学部児童教育学科 教授 藤原 義博 氏

3 研修内容

【1回目】

・平成27年7月10日(金) 9:40~16:30

・各学部の授業を参観していただき、授業改善に向けて指導、助言をいただき、合わせて『自立と社会参加につなげる授業づくり』をテーマに講義をしていただいた。

指導助言・講義の内容

(1) 小学部3学級 『まなびタイム』(自立活動・国語・算数)

- ・個別学習の際、多くの学級で集中しやすいように配慮として衝立が使用されているが、必要ない。集中できないのはなぜか、その理由を見極め、アプローチを。参加が難しいと思われる児童生徒こそ参加の機会を設定し、経験を積むことが必要。
- ・児童の報告、確認の際、その活動に価値(意味)を見出すと、しっかりと手元や相手を見ている。形式的になっていると見ていない。両手での受け取りなど態度や物の扱い方も、教師が児童に合わせるのではなく、児童が教師に合わせる(考えさせる)経験を積むように。

(2) 中学部5グループ 『自立活動』『学びタイム』(自立活動・国語・数学)

- ・教師が生徒の側に行き、目線を合わせたやりとりをしている。丁寧な対応だが中学部段階では適切ではない。教師が向かうのではなく、生徒が動くようにし年齢相応の経験となるように。
- ・グループ学習、発表と際、教師とのやり取りで終わっている。みんなに向かって、という意識が持てるように、発表に使うツールの大きさ、机の配置など環境設定の工夫を。
- ・活動しやすい環境設定を生徒自身が行えるように。身体支援も生徒自身が力の入れ方を感じられるような支援の仕方をし、生徒が考える経験を。

(3) 高等部6グループ 『作業学習』(栽培班・農加工班・木工班・流通班・窯業班・手芸班)

- ・全体として生徒がまじめに活動している。教師の対応も丁寧で、表情もよい。
- ・生徒が困っているときに教師が生徒の側に行って丁寧に対応している。自分から相談や確認が出来るように、生徒が呼ぶ、自分から確認に行くという経験を。
- ・生徒自身が自分の活動を確認できるツールはチェックリスト。自分で考え、判断できる(価値のある)ツールとなるように、報告や確認もチェックリストを介して行うように。
- ・作業の準備や確認なども生徒にできることは生徒同士でできるように。

(4) 講義、その他全体として

- ・本校の先生方は丁寧に指導をしており、児童生徒も意欲を持ってまじめに活動をしている。それは本校の教育成果として捉え、今後は授業の質を高めていくとよい。
- ・研究の対象児童生徒を設定しての授業であったが、指導者が児童生徒個人の課題として捉えていることは、障がい特性等による個々の問題であることより、児童生徒に共通した授業づくり全体の課題であることが多い。
- ・個への丁寧な対応故に、児童生徒が自分で考えたり行動したりする機会を奪ってしまっている場合もあること、児童生徒の年齢相応の体験や対応をしていく必要がある。
- ・人による手厚い支援から児童生徒が自分の意思・判断で責任を持って行動できるよう「学びの機会」の見直しを。活動・参加の機会、やりとりの機会、評価の機会を豊かにしていくことが重要である。

【2回目】

- ・平成27年11月27日（金） 9：40～16：30
- ・前回の指導助言をもとにそれぞれグループ、学級で授業改善を行った。授業を参観していただき、成果を確認していただいたり、次の段階に向けての課題や見直しが必要な点等、次への授業改善に向けて指導・助言をいただいた。また、『主体的な授業参加を促すわかって動ける授業づくりの在り方』をテーマに講義をしていただいた。

指導助言・講義の内容

- (1) 小学部3年生重複障がい学級 『まなびタイム』（自立活動・国語・算数）
 - ◎絵本を介して発表や児童同士の相互評価等、参加の機会が設定されたことで、児童がしっかりと学習に参加している。
 - ⇒発表が、「先生と児童のやりとり」の形態になってしまっている。ホワイトボードを中心に置き、それを介してみんなに向けて発表させる形態へと環境設定を。（朝の会等も）
 - ◎報告・確認の態度がよくなり主体的な活動が増えた。
 - ⇒報告以外の場面でも、先生が児童の側に行き丁寧に対応している場面がある。自分から教師の方へ確認に向かうことが出来なくなることに。MT・STの役割分担を見直し、STは、先生と一緒にやる課題を行う担当に。
 - ◎自分のやったことの評価が花丸や評価表等きちんと作られている。
 - ⇒共通の様式にすると、学習の振り返りにも活用でき、横のつながりの場面が設定できる。
- (2) 中学部2年生重複障がい学級 『学びタイム』（自立活動・国語・数学）
 - ◎報告の態度がよくなっている。きちんと教師に対面し、視線もしっかりと向けている。次に報告を待つ生徒もきちんとした態度で待っている。
 - ⇒活動に意味（価値）を見出している。
 - ◎自分で準備→課題へ取り組む→報告 という一連の活動になっている。主体的な行動が増え、自己確認の意識も高まっている。
 - ⇒小学部同様、自分の行ったことの結果がわかる評価を残し、確認できるようにすることで、さらに自己確認を高め、協働学習の場を設定することにつながる。
 - ⇒他害のある生徒の配慮として衝突があるが、配慮だけでは問題は解決しない。問題がどこにあるか考え、みんなに合わせて行動できるようになる体験を積んでいくことが大切。
- (3) 高等部1学年基礎コース 『作業学習』栽培班
 - ◎グループリーダーに準備・片付けの確認を任せ、手順書をもとにした確認が出来ている。
 - ◎作業も作業手順に基づいて活動できている。活動→確認→次の活動と言う流れで行われることで失敗や間違っただけではなく、自己確認の意識や作業（製品）の質の向上にもつながっている。自分から聞きに行くことも出来ている。
 - ◎物の扱い、作業の態度が成果として見られる。
 - ⇒次のステップとして個人で行っている報告を、グループ内で確認しあい（相互確認）、リーダーがまとめて報告しに行くという形式にしていくとよい。（準備、片付け等も）
 - グループ確認等で横のつながりを意識していくと早く終わったからまだのところを手伝うと言う意識にもつながる。
- (4) 講義、その他全体として
 - ・前回から各学部報告の態度から活動にしっかりと価値を見出していることがわかる。これは教育効果としてしっかり確認し、次のステップ（横のつながり）へ。
 - ・全ての児童生徒が主体的にわかって動けるように、『事例改善』ではなく『授業改善』を。
 - ・個々の児童生徒の問題、配慮ではなく授業全体、全ての児童生徒への配慮を考える。

4 まとめ

児童生徒個々への丁寧な支援により、過支援・未経験となっていることが多くあることが分かった。今後、報告・確認・賞賛の在り方等、教師がその意味を捉えなおし、学習の参加、児童生徒同士のやり取りの機会等見直し、一人一人が主体的な活動となるように授業改善をすすめていきたい。